Tea Times

お茶の水女子大学広報誌 ● Tea Times ● October 2004

11

CONTENTS VOL.11

特　集

お茶大キャンパスのエコロジー … ②〜⑤

機構紹介③ ―国際・研究機構― …… ⑥

道を切り開いた先達たち②
パリに生きた物理学者　湯浅　年子 …… ⑦

お茶の水女子大学　貴重資料紹介 …… ⑧

- 瑠璃の国アフガニスタンからの留学生 …… ⑨
- 日本の中学生と一緒に夏を楽しむ …… ⑨
- 海外語学研修プログラム紹介 …… ⑩
- 海洋環境学ダイビング実習紹介 …… ⑩

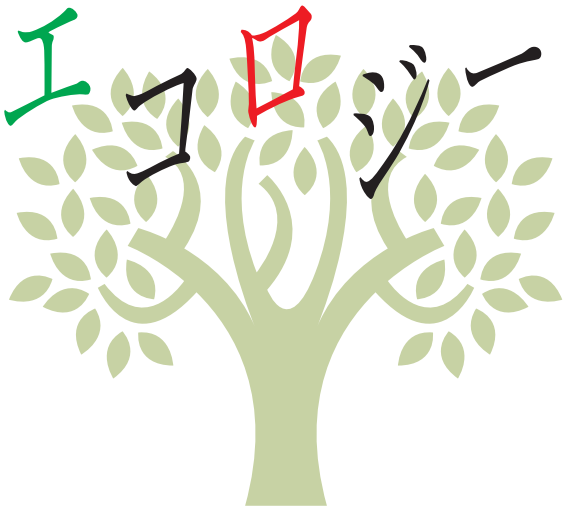
アフガニスタンから来日した指導的女子教育者に学んだこと …… ⑪

ジェンダー差の解消をめざして …… ⑫

- 公開講座のご案内 …… ⑫
- 大学の暦 …… ⑫
- 編集後記 …… ⑫

特集

お茶大キャンパスのエコロジー



今、全国の大学で、キャンパス内の環境対策が始まっています。ふだんから身近な環境問題・環境教育に興味を持って活動している学生たちが、本学の環境への取り組みを取材しました。

学生レポーター
赤　石　布美子（大学院人間文化研究科前期課程１年）
石　田　麻里子（理学部生物学科３年）
鵜　沢　美穂子（理学部生物学科３年）
田　中　順　子（文教育学部人文科学科２年）

助言・協力
冨　永　典　子（生活環境研究センター教授）

取材協力
施　設　課
山　口　久　郎（会計課調達係）
市　岡　裕　美（お茶大生協理事）
宇　土　紋　加（徽音祭実行委員、生活科学部生活環境学科２年）
清　宮　聡　子（附属幼稚園教諭）
田　中　千　尋（附属小学校教諭）
佐　藤　道　幸（附属中学校教諭）
田　中　京　子（附属高等学校教諭）

徽音祭でのエコの取り組み

最近、多くの大学の学園祭で、エコに対する取り組みが行われるようになってきました。今年、お茶大の学園祭である徽音祭（11 月 13 ～ 14 日）でも、初の試みでエコ活動を実施します。その１つとしてゴミの分別収集に力を入れたいと考えています。そのためにまず､可燃･不燃・お皿・割り箸・缶・ビン・ペットボトルの７種類のゴミ箱を設置し、参加者のみなさんにゴミの分別に協力してもらいます。このうちお皿と割り箸は直接回収業者に受け渡します。缶・ビンは大学が、ペットボトルはお茶大生協がいったん引き取り、それぞれの回収ルートを通じてリサイクルにまわします。

また今年は、徽音祭のパンフレットも回収します。帰るときに不要になったパンフレットを、門に置いてある回収ボックスに入れてもらい、まとめて資源ゴミとして出す予定です。

そのほか､「学びのポイントラリー」のコーナーではエコ活動に対して来場者の方に意識を深めてもらうため、ゴミ回収ルートやリサイクル方法などについての掲示物を展示します。

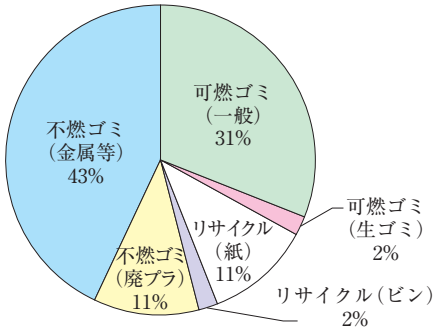
徽音祭でのエコ活動が成功するよう、参加者のみなさんに協力の呼びかけをおこなっていきます。

キャンパスでのリサイクル

キャンパスでのリサイクルは現在どのようになっているのでしょうか。まず、私たちがキャンパスで排出しているゴミはどのようなものがあるかを図１に示しました。不燃物、可燃物が多く、リサイクルに回ったのは、わずか 13% です。

一番量の多かった不燃ゴミ（金属類）は、いわゆる粗大ゴミを含みます。これまで、不要となった大きな備品類は倉庫に一時保管し、一定期間保持した後に廃棄処分をしていました。その間に希望する学科等があった場合、供用換の手続きを取っていました。しかし、返納品の学科への周知が不十分であったため、供用換がなかなか進みませんでした。今後は学内広報手段を使い、一定期間の周知を進める計画とのことです。

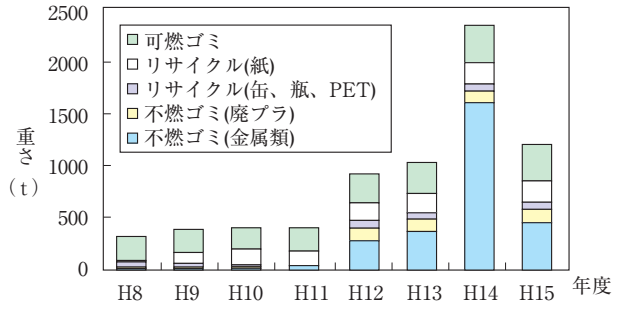
■図１　大学構内から排出したゴミ組成（平成15年度）



次いで多かった可燃ゴミは、主に紙ゴミです。教育機関である大学の特質上、大量の印刷物が日常的に出ます。これらは、各棟に設置してある、紙専用リサイクルボックスからリサイクルに回されているものもありますが、可燃ゴミとして出されているものも多いです。OA紙だけ見ると、リサイクル率61.1%（平成15年度）です。紙のリサイクル率を上げることで、可燃ゴミを減らせると考えられます。紙類については、両面印刷や裏紙を使って印刷紙の枚数を減らす、メールやPDFファイル化をしてペーパーレス化を進める、など紙の使用枚数の削減に努めることが重要だと思われます。

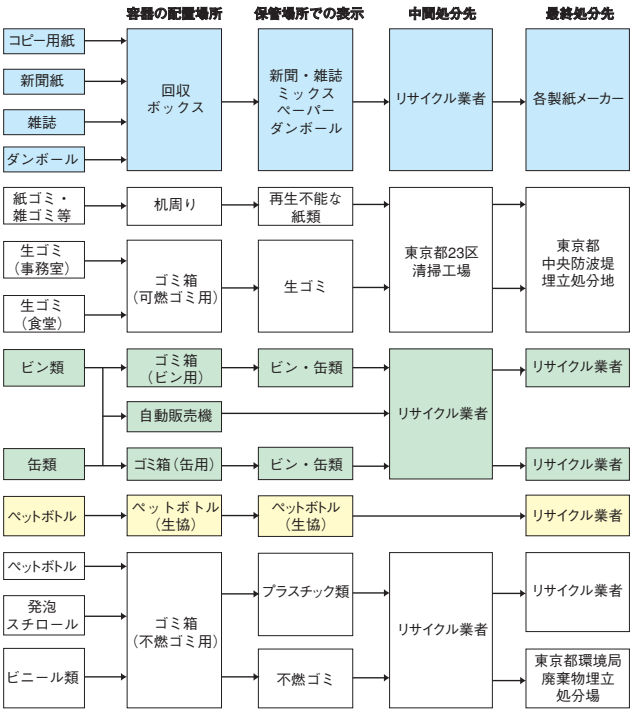
不燃ゴミ（廃プラ）も、なるべく買い物の時に袋を貰わない、などの無駄をなくす、ペットボトル、弁当容器など回収しているものはリサイクルに回す、などで排出量を削減できると思います。

■図2　大学構内からの廃棄物量年次推移



次に、年度毎のゴミの排出量を図2に示しました。年々私たちの排出するゴミは増加傾向を示しているのが分かります。なお、平成14年度は総合研究棟が竣工し、それによる引っ越しに伴い、いわゆる粗大ゴミが大量に排出されたため突出していると考えられます。

■図3　ごみ処理・リサイクルフロー図



最後に、大学構内で行っているゴミの分別を図3に示しました。色が付いているのがリサイクルに回すものです。ゴミが出る最初の段階で分別がよく行われていれば、それだけ資源化の可能性が高まります。ゴミ分別が進むよう、学生、教職員の協力が不可欠です。

廃棄物処理でよく用いられている3Rという言葉があります。3Rとは

Reduce：ゴミの排出を減らす（無駄なものは買わない、貰わない）

Reuse　：使えるものは他で再使用する（他の必要としているところに回す）

Recycle：リサイクル回収に回す（紙類、ビン、缶、ペットボトルなどは回収ボックスに回す）

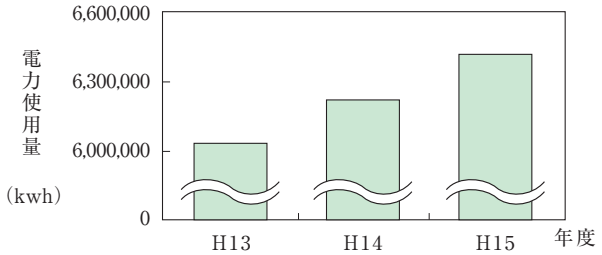
ということを指します。Reduceを最も優先し、次はReuse、その次にRecycleを考えます。大学においても、なるべく無駄なものは買わない、不要となったものは必要とするところで再利用してもらい、その上でリサイクルしていくことが大切だと思います。

キャンパスの節電対策

キャンパスにおける近年の電力使用量を図4に示しました。

年々電気使用量は増えていることが分かります。これは、平成14年度に総合研究棟の竣工などがあり、その際の最新機器の導入、空調設備の導入が電力増加に繋がったと思われます。

■図4　大学（附属学校園含む）内の年間電力使用量



実は、建物新設に伴っては、たくさんの節電対策が取られました。電力量は年々増加していますが、節電対策を行った結果、対策を取らなかった場合と比較して緩やかな延び率を示したと考えられます。とられた対策としては、

照　明：器具を省エネ型に交換、人感（熱感）センサーを設置、昼光センサーによる消灯システム

温水器：太陽熱温水器の利用（通常ガス使用量の65%削減）

空　調：1時間タイマーの設定、夏28℃、冬20℃に設定（設定温度を1℃緩和すると10%の電力使用量削減）

換　気：熱交換換気扇（ロスナイ）設置による空調効果の保持（通常換気時の20%削減）

などです。

このような対策が取られたにも関わらず、電気使用量が増えてしまっているわけです。私たちができることは、無駄な電力消費を抑制することです。例えば、

無駄な電力の削減：人のいないところは、こまめに電気、空調を切る。

過剰冷暖房の削減：空調の温度設定を夏は28℃、冬は20℃にする。

待機電力の削減：不使用時はこまめにパソコン、プリンタの電源を切る。使っていない機器はコンセントを抜く。

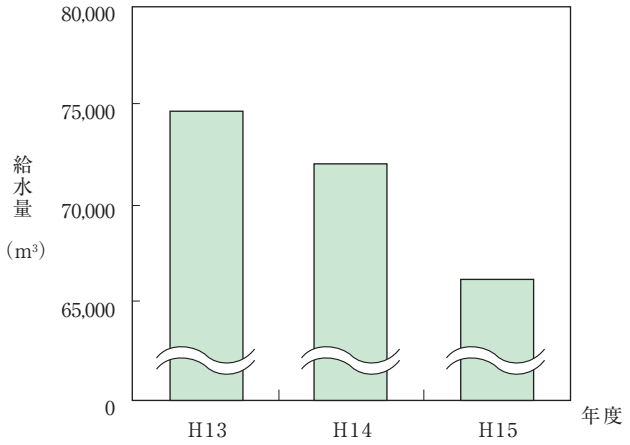
などを心がけることです。電気をつくるのにも、燃料の採掘、送電など大変なリスク、コストがかかっていることを認識し、電気を無駄にすることの無いようにしたいものです。

キャンパスの節水対策

近年のキャンパス内の水道使用量を図5に示しました。

給水量は減少しています。平成15年度では前年度に比較して顕著に給水量が減少しました。

■図5　大学（附属学校園含む）内の年間給水量（水道使用量）



大学での水使用は、主にトイレと考えられています。これに着目して以下のようなシステムが導入されたことが、効果を上げたようです。

便器洗浄水：擬音装置設置（従来比の60%削減）
自動洗浄システム導入（60%削減）
節水バルブ導入（30%削減）

手洗浄水　：手洗い場への自動水栓取り付け（通常水栓の60%削減）

トイレ以外の水の使用時には水を流しっ放しにしないようにすることが大切です。流しっ放しにすると1分で12ℓもの水が流れます。浄水を得るのに大量のエネルギーやコストがかかっています。水をこまめに止める、容器に溜めて使う、勢いよく出し過ぎないなどの心掛けで、もっと節水が可能になると思われます。

大学のグリーン購入

『グリーン購入』という言葉をご存知ですか？製品やサービスを購入する際に、できるだけ環境にやさしいものを選ぼうという試みです。平成13年に国が定めた「グリーン購入法」により、企業は基準をクリアした商品を「グリーン購入法適合商品」としてカタログに載せ、販売しています。

お茶大ではグリーン購入の達成率はいずれも100%です。つまり、グリーン購入が可能な品目についてはグリーン購入法適合商品のみを購入しているのです。大学会計課にあるカタログを見ると、文具・オフィス用品から果てはカーテン、椅子に至るまでありとあらゆるものにグリーン購入法適合商品が開発されているのに驚きました。企業においても、イメージアップを図るため進んでグリーン購入法適合商品を開発しているようです。非常に効率的なシステムだと思いました。

達成率の高さを見ても分かるようにお茶大はグリーン購入に積極的に取り組んでいます。「環境問題は構造的な問題であり、環境負荷の低減は高等教育機関である本学の責務でもあります。環境に優しい物品を本学が率先して購入することで、生産側のリサイクル需要と環境物品の開発及び教職員への興味関心を惹起し、波及効果に

会計課の棚にずらりと並んだカタログ。これらの中からグリーン購入法適合商品を選んで大学の備品を購入しています。

会計課で実際に使用されている文房具。下は再生紙を使ったファイルで、上はインクの詰め替えが可能なカラーペン。どちらもグリーン購入法適合商品です。カタログには右下のようなマークがついています。

よってより環境物品への比重が高まるといった、ライフサイクルの転換と相乗効果が起こせればと思っています」（会計課山口氏）とのお話のように、グリーン購入は大学が進んで取り組むことが大きな効果をもつ活動だと思いました。

生協の取り組み

大学構内には、現在ペットボトルのリサイクルボックスが3ヶ所にあります。これらのリサイクルボックスに集められたペットボトルは、生協の回収ルートによってリサイクルされています。また、現在さまざまな大学生協で進められている弁当容器のリサイクル・リユースをお茶大生協でも実施しています。これは、容器内側表面のシールのみを剥がし、容器本体を回収後、再利用するものです。回収時にシールを剥がすだけで洗浄の必要がない利便性から、ゴミの削減を目的に採用されました。その他にも以下の表に示すような様々な環境への取り組みをしています。

食堂の廃棄油のリサイクル（燃料等） 低環境負荷の洗剤の使用 古紙リサイクル 飲料缶リサイクル
店頭で回収されリサイクルされる物品： コピーカード、電池、プリンタートナーカートリッジ（リサイクルトナーの店頭販売も）

ペットボトル専用リサイクルボックス
生協店舗前の2ヵ所に加え、リサイクル推進を図って共通講義棟2号館玄関にも設置されました。

附属学校園の取り組みと環境教育

お茶大にはキャンパス内に幼稚園から高校までの附属学校園があります。各校園には太陽光発電パネルが設置され、全体で年間約39万円の節約となっています。

附属幼稚園では、幼児自身が周囲の様々な環境に好奇心をもってかかわり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養うことをねらいとして教育に取り組んでいますが、幼児のモデルとして大事な環境の要因となるのは教師自身の在り方です。ゴミを分別して捨てる、製作材料の素材を無駄にせず、使い切るなどを心がけています。また、家庭から集められた廃物を生かし、創造的な製作を行うよう指導しています。

附属小学校では、ゴミを分別する、教室の電灯・電気製品をこまめに消す、クーラーがないため打ち水を良く行う（確実に温度が下がる）、リサイクルボックスを設置し、造形の時間などで余った紙を入れておき、新品の紙を使用する前に使えるものがあるかチェックするなどの取り組みを行っています。

附属中学校は、平成14年度から3ヵ年計画で省エネスクールの研究指定を受けました。これまでの2年間の実践としては、多様な資料をもとに、環境問題やエネルギー資源の枯渇など現状を認識し、対応策について考察しました。その上でゲストティーチャーを迎えながら実際に省エネルギーの方法を聞き、家庭の省エネルギーを実践しました。

附属高等学校は、昨年度より3年間、エネルギー教育実践校に指定され、教科を超え全校で取り組んでいます。日常ではゴミの分別収集の徹底、紙・ペットボトルの回収、蛇口の流出量を絞る、廊下の消灯、コンポストによる生ゴミの堆肥化などに努力しています。

冨永典子教授のコメント

生活環境研究センターでは環境問題に興味を持つ学生ボランティアによる活動を行っていますが、本学の学生ひとりひとりがキャンパスでの環境問題にどのように取り組んでいるかが気になります。4年生になって各研究室に所属すると、少しは組織立ててエコ活動に取り組めますが、それまではその気持ちがあってもどのようにすればよいか分からないということではないかと思います。大学として何らかの広報活動が必要でしょう。意識の高い社会人を送り出すことも大学の使命ですから。

機構紹介③

── 国際・研究機構 ──

前号に引き続き、本学の運営を担う機構を紹介いたします。今回は、国際交流室・研究推進室から構成される国際・研究機構です。それぞれの室長に紹介していただきます。

国際交流室

「国際交流事業の充実と多様化を目指して」

国際交流室長　小風 秀雅（文教育学部）

国際交流室は、今までの、国際交流委員会、留学生センター、開発途上国女子教育協力センターなどで行なってきた交流事業を一元化して、本学の国際交流事業全般について、一層の充実を図るため、設置された組織です。室の設置と同時に、従来研究協力室と留学生課で担当してきた事務部門も国際・学術課に統合され、教職員一体となって、事業に取り組んでいます。

本学の国際交流事業は、外国人留学生数で見ると240名ほどで絶対数はそれほど多くありませんが、教員1人あたり約1人の留学生を抱え、分野も文系・理系にまたがっており、大学の規模に比して、多くの学生を受け入れています。こうした傾向はこの数年とみに強まってきましたが、問題も抱えています。大学院での研究を希望する外国人留学生の受け入れを中心とした分野に重点が置かれてきたため、学部の留学生の比率は低く、また短期の留学生受け入れもほとんどありませんでした。本学学生の海外留学についても同様の傾向があり、受け入れ、送り出しともに、学生数の増加と交換大学の拡大・多様化が今後の課題となっています。今後は、学部学生の交流、短期留学制度の拡充、学生の共同指導の充実、より多くの国や地域との交流の推進などに力を注ぎ、国際人としての経験と見識を備えた学生の育成に努めていきたい、と考えています。

また、学部学生、大学院生に限らず、アジアを中心とした女性研究者の研究支援、さらには大学間の学術・研究交流を拡大していくことも、21世紀において本学が果たすべき重要な役割であり、こうした事業の拡充も大きな課題です。

大学の個性を生かした国際交流のあり方とは何か、世界のなかで本学が果たすべき役割とは何か、を見据えて、研究・教育の国際化を推進していきたいと考えております。

研究推進室

「枝先の木の実」

研究推進室長　羽入 佐和子（文教育学部）

研究推進室の大きな課題の一つに、運営費交付金の削減に備えて外部資金を獲得することがあります。そのために、これまでにもいくつかのプロジェクトを組織したり、本学の知的財産を紹介する研究誌や冊子の発行を企画してきました。また、二つのセンター（共通機器センター、ラジオアイソトープ実験センター）の管理運営、職務上の発明をはじめ研究に関する規定の整備も室の仕事になっています。さらに、「お茶の水女子大学出版会」の設立についても目下検討中です。そして、多岐にわたるこれらの仕事は、室の６名の先生方と事務局によって担われ、事柄に応じて多くの先生方にもご協力をいただいてきました。

研究推進室の本来の役割は、質を異にするそれぞれの研究分野に相応しい研究環境を整えることだとも考えられます。かつてデカルトは学問を一本の木に喩え、根は形而上学、幹は自然学、幹に連なる枝は生活に役立つ技術や道徳で、この枝先からだけ学の効用として木の実が収穫されるといいましたが、豊かな実を結ぶには、根は強く、幹は太く、枝はしなやかでなくてはならないでしょうし、それぞれの成長に必要な条件も同じではないと思われます。歴史ある本学の学問の木が、その枝先にいっそう豊かな実を結ぶのに役立つ研究推進室であるよう心がけたいと思っています。

道を切り開いた
先達たち

2

パリに生きた物理学者 湯浅年子

埼玉大学名誉教授
山崎　美和恵

湯浅年子は、フランスを研究の場として原子核実験に取り組み、多くの業績を挙げた日本女性物理学者の大先駆である。1909年（明治42年）12月、東京に生まれ、自然界の美しさ、不思議さに惹かれて物理学を選び、東京女子高等師範学校理科、ついで東京文理科大学物理学科を卒業して原子分子分光学の研究に踏み出した。当時の日本社会は男女差別が激しく、研究に生きる道をフランスに求めて、40年留学生として渡仏。キュリー夫人の女婿、F.ジョリオ＝キュリーに師事してコレジ・ド・フランス原子核化学研究所で原子核実験を始める。国籍も性別も捨象された研究所の雰囲気に「魂の自由を得た」と感激するが、程なくパリはドイツの占領下に入り、さまざまな苦難に襲われる。それにめげることなくβ線スペクトルの研究に取り組み、43年末フランス国家学位を取得。44年夏のパリ開放を目前にベルリンに退避させられるが、大空襲下でβ線分光器を製作。ドイツ敗戦により、それをリュックサックに入れてシベリア経由で45年6月末帰国。祖国では米占領軍による原子核実験禁止令により研究の道は閉ざされ、お茶の水女子大学の設立や後進の育成に精力的に活動した。49年再渡仏。β崩壊、原子核反応と最先端の難問題に取り組み、成果を挙げて地歩を固めて行く。55年お茶の水女子大学退職。パリ郊外オルセーに移転した原子核研究所でCNRS（国立中央科学研究所）研究員として研究一筋の道を歩み続け、優れた業績を挙げて、国際的に活躍した。少数核子系に対する日仏共同研究を計画し、胃と胆嚢を切除した後のきびしい体調を押してその実現に奮闘する。その実施決定をみた80年2月、70歳でパリに逝った。

ジョリオ＝キュリー夫妻をはじめ多くの知友と篤い交わりをもち、一方で豊かな感性と知性によってフランス文化の真髄を掴み取り、思索・真情に溢れた多くのエッセイを書いて、人々に感動を与えた。その類い希な個性は行動力と相俟って、魅力溢れる存在感を与えていた。祖国の伝統文化に愛情と誇を持ち、それを異国の人々に熱く伝え、自らは折にふれて和歌を詠んだ。また、若手研究者をオルセーに招いて共同研究し、日仏文化人の交流を計り、パリを訪れる人々の世話やもてなしをするなど、“私設文化大使”と称されたほど、日仏の学術文化交流に大きく貢献した。ひろい豊かな愛こそが科学する心のもとである、自分自身のためでなく科学の進歩のために研究しなければならないと、研究への強い意識をもちつつ、真摯に人生に向き合った生涯であった。76年紫綬褒章、80年勲３等瑞宝章を受章。

3

お茶の水女子大学
貴重資料紹介

サロン用グランドピアノ
BECHSTEIN　L型

大学資料委員会委員　秋山　光文（文教育学部）

去る7月30日、文教育学部2号館にある音楽表現コースのレッスン室で、本田学長や同窓会関係者などが臨席し、演奏会が開催された。これは大学資料委員会が進める貴重資料修復事業報告の一環として企画された催しで、80年ほど前に製造され昨年修復が完了した小型のグランドピアノを使用し、昨年秋に同コースに就任した小坂圭太助教授の演奏と解説でドビュッシーとＪ．Ｓ．バッハの小品が紹介された。このピアノは、関東大震災(1923年)によって全壊した本学お茶の水キャンパスの附属女学校（現附属高等学校）仮校舎に、当時の保護者から震災の翌年寄贈されたものであることがわかっている。本学が現キャンパスに移転した昭和7(1932)年以来、半世紀以上に亘って生徒たちの音楽の授業に使用されていたものの、経年的な劣化により廃棄寸前の状態に陥っていた。しかし、附属高等学校の校内紙に掲載された窮状を訴える生徒たちの記事が契機となり、今回の修復事業が決定されたのである。

ところでこのピアノは、1920年代にドイツで製造されたベヒシュタイン社製のサロン用グランドピアノで、全体のサイズが通常のピアノよりもひとまわりほど小さいために高音部の鍵盤が少なく、85鍵（通常は88鍵）という珍しい型式。また、制作時期が丁度第1次世界大戦直後にあたり、戦争中の生産中断期間にケースに使用される木材が長期間に亘って寝かされていたため、同社が創業（1853年）以来掲げている「響板での音作り」という一貫した設計コンセプトに最もふさわしい状態の楽器に仕上がってるという。今回の演奏曲目にも選ばれたドビュッシーは、自らもこの楽器を愛用し、「ピアノ音楽はベヒシュタインのためだけに書かれるべきだ」という言葉を残している。今回のコンサートは、作曲家の抱いていた音のイメージを作曲家と同じ時代の楽器で再現するという、大変貴重な演奏会でもあった。

本学にはこのピアノのほか、ほぼ同時期に寄贈されたもう1台の同型ベヒシュタイン社製ピアノが附属小学校にも伝えられている。こちらの方も近年まで使用されていたがやはり傷みが進んだため、同窓会（茗鏡会）の有志の方々による募金によって元の姿に甦り、再び児童たちの音楽の授業に使用されることになった。

いずれにせよ、本学にはこうした貴重なピアノが2台も保存されることになり、しかもどちらもが音楽教育に使用されるというのは特筆すべきことであろう。貴重資料としての楽器であると同時に、実際に演奏されることで始めてその真価が発揮されるのである。

海外語学研修プログラム紹介

カリキュラム

語学センター長　牛江　ゆき子

本学では、今年度から、海外語学研修が始まりました。これは、本学が提携した英語圏の大学で５～６週間、語学研修を行うというもので、語学力の向上と異文化理解を目的としています。この研修では、各大学の語学センターで英語の研修を受けるだけでなく、大学本体の正規の授業を聴講することができ、英語圏の大学の授業がどのように行われるのかを実際にクラスに参加することで直に体験できます。研修期間中はホームステイをし、ステイ先の家族との交流を通しても、英語力をつけ、異文化理解を深めます。この研修を修了すると、通年１コマ分の英語の単位が認定されます。

今年度は、44名の学生が７月末から３カ国の３大学（アメリカのカリフォルニア大学サンディエゴ校、オーストラリアのクイーンズランド大学、ニュージーランドのオタゴ大学）での研修に参加しました。研修先では、現地の文化や自然に触れるためのプログラムも用意され、参加学生は、英語の学習以外にも貴重な経験をしました。本学では教員は引率しないので、学生たちは、異文化において自分たちで問題等に対処することが求められ、研修を通して、独立心や自信を強め、一回りたくましくなって帰ってきました。

オーストラリア・クィーンズランド大学キャンパス

海洋環境学ダイビング実習紹介

カリキュラム

湾岸生物教育研究センター長　清本　正人

館山の湾岸生物教育研究センターでは、今年から新しい実習を行う事になりました。海洋での観察技術の習得を目的とした全国的にも珍しい実習で、ダイビング認定証を取得し、水中観察・記録技術の習得を行います。全学共通科目なので、文系・理系を問わず興味をもつ人は誰でも受講できますが、相応の遊泳能力は必要です。館山での実習に先立ち、７月に大塚キャンパスで潜水の基礎や海洋生物についての授業を行いました。

直前に日本に上陸した台風16号の影響が心配されましたが、９月１日からの現地での実習は予定通り行うことができました。まず、シュノーケリングから始まり、潜水器材を身に付けて海中でのスキューバーダイビングのトレーニングを行いました。水中では浮力により、姿勢や移動のコントロールが難しいのですが、受講生はだんだんと慣れてきました。そして、いよいよ海洋生物の観察です。記録のためのデジタルカメラを片手に、さまざまな魚やサンゴなど海洋生物の生息状況を調べ、１時間程度の潜水時間があっという間に過ぎました。その後、モニターに写し出した写真を手がかりに、観察された生物のリストを作成しました。生き物の種類の特定が難しい事を実感しながらも黒潮の影響により南方系の種類の多い房総南部の海の生物相の特徴を確認できました。

ジェンダー差の解消をめざして

女性支援室長　河野　貴代美（ジェンダー研究センター）

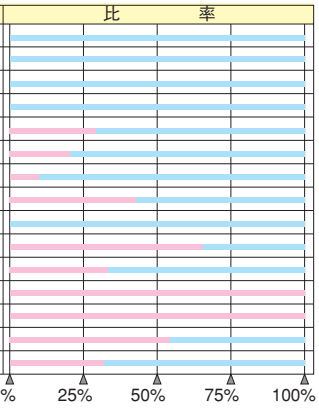
本学には、他の大学教育施設に比べて女性教員が多いという単純な感想をお持ちの方もおられるだろう。わたしもその一人で、実は学外者のみなさんに「自慢げ」にそう伝えてきた。

現実の数字は以下の図表の通りである。教員数で言えば、たしかに男女ほぼ伯仲というところだが、構造的には男性「上位」のピラミット型が歴然としている。附属学校部の管理職は女性が多いが、あくまで「副」である。職員となれば、この傾向はさらに先鋭化する。

教育・研究の質量を改革し、斬新なメッセージの発信基地であるためには、さらなるジェンダー差の解消が期待される。

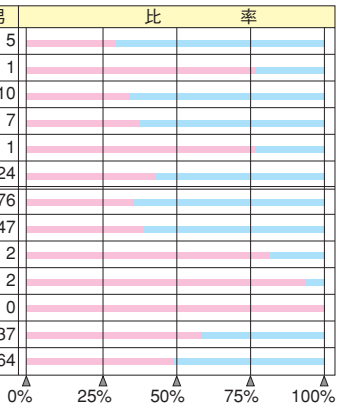
職員

教員	女	男
事務局長	0	1
課長	0	8
事務長（室長）	0	1
課長補佐	0	4
専門員	2	5
専門職員	2	8
係長	2	20
主任	3	4
技術系係長	0	3
技術専門職員	2	1
技術職員	1	2
図書系係長	3	0
図書館職員	3	0
一般職員	14	12
合計	32	69



教員

教員	女	男
役職員（学長・理事・監事）	2	5
学部長・研究科長	3	1
センター長	5	10
室長	4	7
副校長・副園長	3	1
合計	17	24
教授	39	76
助教授	30	47
講師	9	2
助手	23	2
リサーチフェロー	4	0
教諭	49	37
合計	154	164



大学の暦

平成16年11月～平成17年1月

●11月13日～14日	徽音祭
●11月29日	創立記念日
●12月24日～1月7日	冬季休業
●1月15日～16日	大学入試センター試験

[表紙の写真]　左から、彼岸花、紅葉、唐辛子。
[撮影場所]　お茶の水女子大学構内
[写真提供]　佐竹　元吉　生活環境研究センター教授

編集後記

徽音祭でのエコの取り組み、身近な環境問題にふだんから興味を持って活動している学生たちなど、学生の自発的な動きには心強いものがあります。

ゴミ処理の流れ図で最終処分先として上がっている、「中央防波堤埋立処分場」などの言葉を見ると、キャンパスのゴミ箱がテレビでよく見るゴミの山に直結しているんだなあと今更のように思います。大学としての取り組みもこの１－２年の間にずいぶん進みましたが、ペットボトルやシュレッダーゴミのリサイクルの徹底、廃材・古材や、パソコンを含む備品類のリユースやリサイクルの仕組み作りなど、まだまだ大学がやれること、やらなくてはいけない課題は山積しています。（編集長　柴坂）

公開講座のご案内

『文学の森を歩く―日本文学をあなたと―』

11月　6日（土）「日本古代文学と自然」（萩原千鶴教授）
11月13日（土）「本歌取りとはどういう技法か」
（浅田　徹助教授）
11月20日（土）「近世文学と牢人」（市古夏生教授）
11月27日（土）「日本文学の魅力」（大塚常樹教授）
開　催　時　間：各回13:30～15:00　受講料：6,200円
申し込み締切：10月27日（水）
問い合わせ先：お茶の水女子大学企画広報課

※詳しくは本学ホームページ
（http://www.ocha.ac.jp/koukai/）をご覧ください。

■お茶の水女子大学広報誌

Tea Times 11号

平成16年10月１日発行

■編集発行
お茶の水女子大学　社会連携・広報推進室
本誌に関するご意見・ご要望・記事の掲載などは、お茶の水女子大学企画広報課にお寄せください。

■編集委員
編集長　柴坂　寿子（社会連携・広報推進室）
編集事務　髙橋苗々子（企画広報課）

■問い合わせ先
お茶の水女子大学企画広報課
〒112-8610　東京都文京区大塚2－1－1
TEL 03－5978－5105　FAX 03－5978－5890
E-mail　info@cc.ocha.ac.jp　URL　http://www.ocha.ac.jp

■Tea Timesは本学ホームページでもご覧になれます。
http://www.ocha.ac.jp/syuppan/

製作・印刷／よしみ工産株式会社